



只見短歌会

十二月詠草

大塚栄一

指導

只見俳句会

一月例会

目黒十一

指導

県境の山路下れば雪椿越後の国へ撓ひて並ぶ

小倉キミ子

検査結果恐れつつ待つ病院にクリスマスツリー早も飾らる

古川 英子

大き丸の中に小さき丸二つ描きし孫の絵顔にも見ゆる

新国由紀子

使ひ込みしごぎ毛羽だちて物干すにをさまり良くて未だに使ふ

目黒 富子

師走中雪なき庭の赤き薔薇残り二輪に惹かれつつ過ぐ

関谷登美子

冬至には南瓜に豆腐と伝統を守り来たりて夕餉整ふ

渡部ゆき子

亡き父母の恋しく実家の仏壇に香の煙の消ゆるまで座す

馬場 八智

新年の準備早めに進めるもいつもの如く間に合はぬなり

渡部ヨリ子

英語の字片仮名の文字多くして半分解せぬままに日は過ぐ

新国 洋子

(出詠順)

信

風花もみそらの青に染まりたり
雪の午後子らの歓声響きたり

都

重ね行く移りし日々や日記買う
石蹴って一つ二つと返り花

洋子

山峡の静もって行く雪の夜
きりと嗅ぐ千枚漬や赤南蛮

浩子

兄いもうと二つちがいの柚子湯かな
初暦富士の山より始まりぬ

味代子

朝酒に酔い肘でまどろむ三ヶ日
重ね着や辻の地蔵は赤帽子

恒夫

まず雪のなきこと記す初日記
薪棚のへへのものもへじ寒の雨

礼

赤き実をこぼしに来たる冬の鳥
日はすぐに傾きやすき初雀

修一

病伏す友とのコーヒー冬の雲
浅雪やカーテン開ける手も軽く

一穂

新嫁や村の年賀の輪に座して
初御空酸素大きく吸い込めり

吉児

御供えのありか窺ふ嫁が君
青畳の淑気を切っけてかるた飛ぶ